

自然哲学への試み (1)

——方法としての「沈黙」——

八 卷 和 彦

「なお、もし誰かが自然にその製作の目的を問い、自然が問い手に耳をかたむけて答える気になったとしたら、おそらく次のようにいうだろう。『わたしにそんなことをたずねてはいけません。わたしが口をとぎして、いつも黙っているように、あなた自身も黙って理解しなければなりません。』」

(プロティノス『エンネアデス』)⁽¹⁾

ソクラテス「……それ [書かれた言葉] がものを語っている様子は、あたかも実際に何ごとかを考えているかのように思えるかもしれない。だが、もし君がそこで言われている事柄について、何か教えてもらおうと思って質問すると、いつでもただひとつの同じ合図をするだけである。それに、言葉というものは、ひとたび書きものにされると、どんな言葉でも、それを理解する人々のところであろうと、ぜんぜん不適當な人々のところであろうとおかまいなしに、転々とめぐり歩く。そして、ぜひ話しかけなければならない人々にだけ話しかけ、そうでない人々には黙っているということができない。」

(プラトン『パイドロス』)⁽²⁾

I. はじめに

「自然」(Physis, Natura)とは何かを定義した上で、われわれのこの考察を始めることは、残念ながら今はできない。その理由は、この考察の展開につれて次第に明らかになるはずだが、とりあえずわれわれはアウグスティヌスが

『告白』のなかで時間に関して言ったあの言葉を引用しておきたい。「ではない時間とは何でしょうか。だれも私にたずねないとき、私は知っています。たずねられて説明しようと思うと、知らないのです。」⁽³⁾

これに対して、自然が何であるかは既に明らかになっているのだ、それを遂行しているのは他ならぬ自然科学である、という応えも予想される。それに加えて次のように言う人もいるかもしれない。「これ [自然科学的発見] は、『啓示』という概念が意味するところの本来的な事態、つまり存在における隠されたものについてのより上位の存在の力による告知という事態である。⁽⁴⁾ ……神は、われわれが自然を自分達に手なづけることを望まれたのであり、植物や動物のようにそれに拘束されつづけることは望まれなかったのである。そして彼は、自然知からわれわれが新たなもの、素晴らしいものを形成できるように、われわれに彼の創造力の一端を与えて下さったのである」と。⁽⁵⁾

しかしながら、このような見解に対しては問い返さねばならない。確かに自然科学が自然を一定程度を操作することができているとしても、それが真に自然を理解していることになるのかどうか、それは甚だ疑問ではないだろうか、と。それは、人間の場合を考えれば分かり易いだろう。つまり、或る人が他の誰かを思うがままに操ることが出来ていると思い、実際それにかかなりの程度成功しているとしても、そのことが直ちにその人を理解していることになるかどうか、それとは全く別の事態なのではないかということである。

それ故に、われわれは自然科学とは別の自然探究の方法があってもよいと考えるし、それが今ほど必要とされている時もないのではないかと思うのである。なぜなら、ようやく人間による自然破壊とそれに対する改善策が地球規模で問題となっている昨今、それがもっぱら自然科学の方法に基づいて探究されているのであり、また、それによってのみ可能であるかのように一般に思われているのであるが、実はそれが重大な隘路を形成しているようにわれわれには思われるからである。

少し具体的に説明すればこうである。自然を自然科学的に探究することが、上で引用したデュサウアーの言うような、そのまま[神の命ずる]価値そのものであるという見解が楽観的に過ぎることはもはや論をまたないとしても、自然への人間の関わりはいかにあるべきかという問題について、自然科学的に分析した結果を、倫理学、或いは価値論等の別の原理に依拠して総合するという、いわば先ず分析して、その後に価値論的制御を総合的に遂行するという手続きは、今や必ずしも有効とは考えられないのである。

なぜならば、自然科学的探究の成果が、自然科学およびその実践形態としての科学技術の社会における有り方そのものに基づいて、常に制御不可能な事態へと導かれる傾向がいよいよ顕著になりつつあるからである。即ち、一般に自然科学の成果においては、その方法論上の根拠の故に究極的に確実な真理を主張することは許されず、常に限定条件付きの「真理」のみが提示されるのであるが、この事態が、自然科学的探究の成果に価値的制御を加える場合には、常に足かせとなるのである。というのも、或る結論が或る時点における或る条件の下でのそれであって、未来永劫にわたっていかなる条件の下でも成立するとは限らないとされることは、或る時点において一義的な判断を下さなければならない価値論的判断となじむことがなく、常にその判断と実行を遅らせることになるからである。さらに不都合なことには、或代のように社会そのものが著しく自然科学的に組織されている場合には、一社会に複数の科学研究の場が存在し、それらが同一の問題について互いに異なる結論をあえて主張することも一定の時間の幅の中では可能であるから、そのようにして、ある事態について複数の科学的主張がなされている間は、科学的結論は未完結であるとされることによって、価値論的判断の遂行はいつそう遅らされることになるのである。現状はこれに他ならない。⁽⁶⁾

Ⅱ. 方法としての「沈黙」

そこでわれわれの探究は、方法への反省に向かうことになる。上で見たような、言わば「自然を先ず対象化して分析し、しかる後に総合する」という方法は、自然科学によって哲学が余儀無くさせられているものであるとしても、しかし、それを許容する理由が哲学そのものにも存在するに違いない。さもなければ、そのように両者が方法的に噛み合うことはないからである。ではそれは何であるのか。

イオニアの自然学に代表されるうる自然学的思弁を、紀元前5世紀にソクラテスが自らの自然学的経験にもとづいて排撃し、「魂への配慮」の重要性を説くことによって、ギリシア哲学の方向性を外から内へと向け変えた。それから、数世紀を経て再びギリシアの哲学が、言わば外と内を共に思弁するという形でプロチノスにおいて明確に方向転換をした。そのプロチノスに、われわれの課題にとって重要と思われる二つの印象的な言葉が現れている。その一つは既に小論の冒頭に引用したものである。

そして、もう一つは以下のものである。「われわれは星辰を、天の上に一回限り書きつけられて、しかし自己の使命を果たすべくたえず動いている文字と考えることもできる。」⁽⁷⁾ さらに「むしろこう言わねばならない。星辰の運動は宇宙の保存のためであり、さらに付け加えてもう一つのことにも役立っているのである。即ち、星辰を文字であるかのように見なすならば、この種の文字の読み方を知っている者は、それらの形から未来を読み取ることができるのである。一類比の系統的な使用によって、その意味するところを見出しながら。」⁽⁸⁾

この、星辰を或る種の記された文字とみなし、それを読解することによって、人間が何かを知ることができるという思想は、自然を書物に譬えるという、後のヨーロッパ中世において卓越する比喩の、広義のヘレニズム思想圏における嚆矢とみなすことができるだろう。

他方、ヘブライ思想圏では、早くから同類の比喩が存在していた。旧約聖書「イザヤ書」34,4では神の裁きの日のことを、「天の万象は衰え、もろもろの天は巻物のように巻かれ、その万象はぶどうの木から葉の落ちるように、いちじくの木から葉の落ちるように落ちる」と描写されている。つまり神によって創造された世界は、展開された「巻物」のように存在していると表象されているのである。そしてこの伝統は当然のことながら新約聖書にも引き継がれて、巻物のイメージが全篇にわたって存在する「ヨハネの黙示」の、特に6,14では、「天は巻物が巻かれるように消えていき、すべての山と島はその場所から移されてしまった。」と記されている。

この「自然という書物」の比喩は、ヘレニズムとヘブライズムとが古代ローマ帝国の末期に出会うなかで、おそらく自らも邂逅し、その比喩としての力を強めたであろう。そしてその結果として、「書物」として「語り出す自然」に対して、人間がその「語り」に耳を傾けることによってそれを探究し、さらにその成果を人間もみずから「語る」という形でまとめる、という方法が確立されたのではないだろうか。(この比喩については、いっそう詳細な考察を加えるべく準備しているが、今は *Problematik* を鮮明にするために、これ以上立ち入らない。稿を改めて論ずる予定である。)

さて、すぐ上の引用でプロティノスも言っているように、確かに自然もまた「語る」のであろう。しかしながら、その語り方がどのようなものであるのか、われわれが無理に語らせているのではないのだろうか、と問うこともできるだろう。——ここでわれわれには、カントの有名な言葉を、「理性は一定不変の法則に従う理性判断の諸原理を携えて先導し、自然を強要して自分の問いに答えさせねばならないのであって、徒らに自然に引き廻されて、あたかも幼児が手引き紐でよちよち歩きをするような真似をしなければならないわけではない」⁽⁹⁾ が想起こされる——。また、われわれの耳の傾け方はいまのままてよいのか、という問い掛けがなされることも意味のあることであろう。

ピカートは言っている。「まるで、言葉を裏返された沈黙、沈黙の裏面に他ならないかのように、そのように自明的に、そして目立つこともなく、言葉は沈黙から生ずる。実際、言葉はそれ——つまり沈黙の裏面——なのだ。同様に、沈黙は言葉の裏面なのである。」¹⁰⁰ もし、そうであるならば、自然の語りにおいてもまた、小論の冒頭でプロティノスの言うように、沈黙が意味をもって存在するはずである。すると老子の次のような言葉がわれわれにたち現れて来る。「希言は自然なり。故に飄風は朝を終えず、驟雨は日を終えず。たれかこれを為す者ぞ、天地なり。天地すらなお久しき能わず、而るを況んや人に於いてをや。故に事に道に従う者は、道なれば道に同じくし、徳なれば徳に同じくし、失なれば失に同じくす。道に同じくする者は、道もまたこれを得るを楽しみ、徳に同じくする者は、徳もまたこれを得るを楽しみ、失に同じくする者は、失もまたこれを得るを楽しむ。信足らざれば、信ぜられざる有り。」¹⁰¹

これに対して、沈黙では哲学はできない、「われわれは語ることなしには思索することができない」¹⁰² という語りかけが聞こえて来るかもしれない。確かに、沈黙のみでは哲学は成立しない。しかし、われわれがここで注目しつつある沈黙は、けっして沈黙であるかぎりの沈黙ではなくして、ピカートも言うような、言葉の裏面としての沈黙なのである。いな、むしろわれわれは「裏面」ではなく、言葉の「地(じ)としての沈黙」と表現しておきたい。そして、これは、逆に言葉が「沈黙という図柄」の地となることもありうる体のものである。一方を図柄として観る時に他方は地となり、他方を図柄と観る時には一方が地となるという仕方で、いずれもが図柄となりうるという関係に互いに立ちうるということである。しかしわれわれは、そのいずれが真の図柄なのかと問い詰めてはならないのであって、その両者をただそれとして受け取るしかないはずの事態である。

ここで冒頭のソクラテスの言葉をいま一度想起こすことも無駄ではないだろう。「ぜひ話しかけなければならぬ人々にだけ話しかけ、そうでない人々

には黙っている」ことが必要であると、彼は説いている。これを、やはり冒頭のプロティノスの引用と併せつつ逆に考えれば、われわれが探究において沈黙に出会った時、わわれはカントのように「自然を強要して自分の問いに答えさせる」というのではなく、逆に、われわれ自身が答えに値しないものとして存在しているのではないかと自らに問いかけるべきであるかもしれないのだ。

Ⅲ. 「沈黙」をめぐるヤスパースのハイデッガー批判

そこで、われわれは一つのケース・スタディとして、「沈黙」をめぐる行われているヤスパースのハイデッガー批判を考察してみたい。ヤスパースとハイデッガーという現代を代表する二人の哲学者が「沈黙」に関して何か考察し記している、というわれわれの指摘は、おそらく一般に奇異の念をもって受け止められるであろう。確かに彼らはそれをタイトルとした書物を著しているわけではない。しかし、われわれの見るところ、このテーマは二人の哲学にとって、けっして軽い意味しかもっていなかったというわけではなさそうであり、さらに、従来の哲学に対して強い不信感と危機感をもって自らの哲学を形成した二人が「沈黙」について注目しているということは、重視されてしかるべき理由を有するようと思われるのである。では、考察に入ろう。

さて、ヤスパースが亡くなった時その机上に置かれていたという遺稿が弟子のザーナーによって整理されて、『ハイデッガーに関する覚書』(“Notizen zu Martin Heidegger”¹³ (以下日本語では『覚書』と略す)として出版された。その中に、『言葉』と題されたメモが、ザーナーによって Nr. 233 と番号付けられて存在する。以下でわれわれは、ここに見られるヤスパースの‘Schweigen’ (沈黙) 概念の検討を通じて、Nr. 233 がハイデッガーの名に全く言及することがないものの、紛れもなく後者の「沈黙」概念への批判であることを明らかにし、そのことを通じて両者の「沈黙」観の違いを解明したいと思う。さらに

はその批判のもつ意味から、ヤスパースの哲学がハイデッガーのそれとの対決による所産であるという性格を有することの一端も明らかにしたい。

さて当該箇所は以下のように記されている。「われわれは語ることなしには思索することができない。……ただ言葉をとおしてのみ、われわれは、言葉がむしろ沈黙となる所へと到達するのである。けれどもこの沈黙は、もっとも強く訴えかける語りなのであって、空虚な沈黙ではない。沈黙が現実となるのは、私が語ることを止めることによってではなく、むしろ語ることが〔沈黙へと〕急変する *umschlag* 極限まで私が語ることを押し進めることによってである。しかしそれは、この時間のなかでは直ちに新たにもう一度われわれにとっては言葉となってしまうのである」。⁶⁴

この「沈黙」観は、後に考察するように、確かにヤスパースの「*Seinsspekulation* (存在思弁)」⁶⁵ という裏付けを伴ったものであるが、同時に見して明らかかな程に、西洋思想での神秘主義伝統に典型的な「沈黙」観と強い親近性をもっている。⁶⁶ そしてヤスパース自身、「*Seinsspekulation*」を「第三の神秘主義」とも名付けているのであり、これが神秘主義的性格をもつことを一概に斥けてはいない。⁶⁷

ではこれがどの点で、ハイデッガーの「沈黙」に対する批判となりうるのだろうか。ハイデッガーの哲学において、殊にその「*Kehre*」以後、言葉 *Sprache* への思索が極めて重要な意味を有していることは言をまたないが、それは「言葉は存在の家である」⁶⁸ という有名な言明に代表されている。それはさらに、「言葉は〈明るみにもたらしつつ隠す存在そのもの〉の到来である」⁶⁹ と解き明かされる。

するとこの「言葉そのものが自ら語る」⁷⁰ ものとしての言葉は本来、人間の能力に属するものではなく⁷¹、従って「語ること」と「沈黙」とが、一般の言葉でそうであるように、対立することはない。いなむしろハイデッガーにあっては、この両者は同一の事態の別の現れかたなのであり⁷²、結局、存在の〈顕

現と隠蔽)の二重性に相応した entsprechen 事態なのである。実際ハイデッガーは言葉と沈黙について、別々の本において、次のように共通の構造をもつ説明をしている。

先ず言葉については、“Die Sprache spricht als das Geläut der Stille.”(言葉は静まりの響きとして語る)と。²³次に沈黙についてはこう言う。“Das Schweigen entspricht dem lautlosen Geläut der Stille der ereignend-zeigenden Sage....Das Ereignis ist sagend. Demgemäß spricht die Sprache je nach der Weise, in der das Ereignis sich als solches entbirgt oder entzieht.”(沈黙は、性起し示しつつある語りの静まりの音のない響きに相応している(応じて語る)。……性起は語りつつある。それに応じて、言葉は、性起が自らをそのようなものとして顕わにしたり遠ざけたりする仕方に従って語るのである。)²⁴ここには明らかに言葉と沈黙の同一根源性、共属性が存在している。さらにハイデッガーでは、ロゴスの本質は「根源的には沈黙である」とさえ言われるのである。²⁵

かくして、けっしてわれわれが対象化できないものとしてのハイデッガーにおける存在が、唯一われわれに現れて来る〈場〉としての言葉そのものを、当の言葉によって思惟しようとするハイデッガーの錯綜した営みの中から明らかになってくることは、結局、「存在は自己の本質の黙秘 Verschweigen であり……その黙秘としての存在が言葉の根源である」²⁶ ことである。すると彼にあっては言わば〈初めに言葉ありき〉ではなくて、むしろ西洋の伝統に抗する形で〈始めに沈黙ありき〉ということになる。このように沈黙を存在の本質としてとらえるハイデッガーにあっては、人間の言葉における沈黙も、「われわれは知っていることしか沈黙できない」²⁷ という、逆説的な事態となる。

このような、ハイデッガーにおける言わば「沈黙の形而上学化」にこそ、ヤスパースの主たる批判は向けられている。現にヤスパースは、同じ Nr. 233 の後続する箇所²⁸で、「『初めに語 das Wort ありき』。この多義的な言明は、語が超越者において具象化することを意味しうる。そうなると、この言明は暗号の

性格を捨ててしまい、私が偽りの実在性に夢中になって現実を喪失するという結果をもたらす。……言葉の発生への問いは、人間の発生への問いと同じく、答えられないのだ」と言って、ハイデッガーとは逆に、伝統的な〈初めに言葉ありき〉の立場に立っている。さらに同所で、「たしかに言葉は人間存在の秘密である。……けれどもこの秘密は超越者に関するのではなく、人間存在に関する」と記す。これは、ハイデッガーの「言葉は存在の到来である」という先に引用した言明に対する批判であろう。さらに、Nr. 233 と同じ包みに入っていて『語ることと沈黙すること』という標題⁹⁹をもつ Nr. 234 において彼は、「われわれはまるで突如として超越者に対して開かれるのである」と記している。これは明らかに、「存在はみずからを明かしつつ言葉に到来する。それは常に言葉への途上にある」¹⁰⁰ というハイデッガーの言明への批判であるに違いない。

さらに同じ Nr. 234 の後続する箇所においてヤスパーズは、ポルフェリウスとアウグスティヌスの所論を引用しつつ、「無限なものを思惟しようとする思惟は無力になる……たえず生み出されてくる思惟不可能なものは——沈黙に終わる」と記している。これは、上で見たハイデッガーの「沈黙の形而上学化」、そしてその限りでの「沈黙の対象化」に対する批判である。ヤスパーズにとって沈黙とは、冒頭の引用にあるように「言葉がむしろ沈黙となっ」たものであって、それは究極的で「充実した沈黙」¹⁰¹ であるから、それを対象化して言語で解釈することは、本来不可能なものなのである。

さらに注目すべきことに、冒頭に引用した沈黙についての所論は、最晩年の大著“Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung”（『啓示に面しての哲学的信仰』）S. 196 の一節と基本的な構造においては全く同一である。¹⁰² また同じ本の同じ箇所でも、ヤスパーズは、ハイデッガーの先に見た逆説的な沈黙観「われわれは知っていることしか沈黙できない」と全く逆のことを記している。「このような沈黙とは知っていて言うことを言わずにおくことではな

い」と。⁸³

さらに同書での「Seinsspekulation」に関わる論述を『覚書』と比較すると、この大著が色濃くハイデッガー批判の色彩を帯びていることがいっそう明らかになる。例えば以下のように論じている。「存在とは何か」という問に対しては、「神」「ニルヴァーナ」「一者」「実体」等々と、古来様々な名称をもって答えられて来ている。これらはすべて暗号である。……暗号の彼方を感じとった者はそこからの強力で無言の引きつける力を経験する。その時その者は沈黙する、しかし沈黙できない。何とかして事態を明らかにしようと試みる。……そこで暗号の彼方を思惟する、しかしそれは思惟されたとたんにその思惟によって失われてしまう。……つまり、言葉をもって事態を命名し、明らかにしたと思ったとたにかえってそれを隠蔽してしまう。⁸⁴ つまり、それらは全て暗号Chifferに過ぎず、そのような暗号の領域、即ち対象的思惟の領域は超えられねばならない。

その結果導かれるのが「暗号における、および暗号を超え出ることにおける思惟による実存照明 Die existentielle Erhellung durch Denken in Chiffren und im Überschreiten der Chiffren」⁸⁵である。それは「別種の思惟 das andere Denken」であり、「存在思弁」とも称されるが、それは最高度の抽象化において抽象的であることを止める思惟、対象的なものを振り落としながら実存的になる思惟である。⁸⁶ これは遂行されるその都度の瞬間においてのみ成立するものである。そして、これは実存によって補足される場合のみ存続しうる。⁸⁷ この思惟においては、不可能な存在認識に代わって、思惟において言わば存在への呼びかけ、もしくは存在からの呼びかけが獲得される。挫折が衝撃となり、沈黙の静寂が語ることが成立する。しかし、この思惟に歴史的進歩ということとはなく⁸⁸、学問的な探究の意味での理論もない。通例それは直ちに、あらゆる概念規定を捨てて像や比喩に満たされたものとなるか、或いは、憶測的な事態として、対象的なものを必要とするものに対して間に合わせを提供する概念

性に陥るか、のいずれかへと転じてしまう。³⁹ これをヤスパースは「存在思弁の倒錯」Verkehrung der Seinsspekulationと名付けている。

さらに彼の論に従えば、無根拠性という究極の根拠へと超越することが自己目的化されると、その超越は失われてしまうのだが、それは、或る場合には、「無際限なくさらに先に）das endlose »Weiter«⁴⁰に、また「つねにもう一度 Immer noch einmal」になるか、他の場合には、超越者の「自己引き戻し」とか「自己隠蔽」とかという形での、暗号による偽りの充実が生じる。これの近代における頂点はシェリングである。⁴¹ さらに、存在思弁では「客観的事態 Sachverhalte は導きの糸でしかなく、内容ではない。真実の思弁的思想は内的行為である。存在が明らかになるのは、私が自ら自己を変える時である。これが起こる過程で存在が語りかけるものとなる。思惟がこの意味を手に入れるのは、この運動〔自己変革〕においてであって、お説を垂れること Lehrstück においてではない。」⁴²

以上のように見てくると、ヤスパースの最晩年の大著『啓示に面しての哲学的信仰』の主要部分の一つが紛れもなくハイデッガー哲学との対決という側面を有していることが明らかになると共に、さらにヤスパースのハイデッガーへの批判が、ハイデッガー哲学の後期において中心を占めていた「言葉への思惟」、従ってまた、言葉と同一根源性においてなされている「沈黙への思惟」そのものを巡って展開されていることも明らかになる。

このことは、しかしながらけっして唐突なことではない。ヤスパースは、確かに若い時からハイデッガーのことを「同時代の唯一の哲学者」みなしていた。⁴³ あるいは、『覚書』の最後 Nr. 252 では、孤独な歩みをつづける哲学者の唯一の同行者としてハイデッガーを受けとめていたこともあると、その覚書の前半で美しく叙述している。⁴⁴ つまり、ヤスパースとハイデッガーは、共に従来の哲学の見落としてきた点を思索するという意図において一致していたのであり、その思索の内容も、たとえばわれわれの関心である「沈黙」への注目

という形に現れているように、深く共通しているのである。従って、このヤスパースの批判は、近いがゆえの批判というべきものであろう。

さて、このケース・スタディを締め括るにあたって、ヤスパースとハイデッガーの「沈黙」観を整理しよう。ハイデッガーは、「言葉」と「沈黙」の共属性、同一根源性を認識している。しかしながら、(あるいは、まさにそれ故にか)「沈黙」を言わば対象化しつつ、自己の思索の展開を語っているのである。ここにヤスパースの批判する点がある。他方ヤスパースは、あくまでも〈初めに言葉ありき〉の立場を維持して、「沈黙」と「言葉」の共属性、同一根源性を認めることを回避しようとする。その限りで、「沈黙」はヤスパースにとって「言葉」の「極限」に現れるものであって、それ故に、彼は「沈黙」を対象化してはならないとしている。と同時に、それだからこそ「沈黙」は哲学において扱うことができない、と言っているように見える。

そこでわれわれの次の課題は、この両者の立つ地平の間を進み行くことのできる道は、自然哲学への試みにおいて存在していないのかどうか、それを探究することとなる。ヤスパース自身、先に見た別種の思惟に関わって、「別種の思惟すなわち哲学的思弁の思惟……ここにおいてわれわれはアジアの人々と出会うのである」⁴⁹ と記しているのであるから。

注(1) Plotinos, *Enneades*, III, 8, 4. (Armstrong III, p.368) (訳文は田之頭安彦訳 (中央公論社版281頁) を借用。)

(2) Platon, *Phaedrus*. (J. Burnet, *Platonis Opera* II [1910² Oxford Classical Texts] 275 d 7-e 3) (訳文は藤沢令夫訳 (岩波書店版) を借用。)

(3) Augustinus, *Confessiones*, XI, 14, n. 17, 8f. [CCSL, XXVII, p. 202] (訳文は山田晶訳 (中央公論社版) を借用。)

(4) Dessauer, Friedrich, *Begegnung zwischen Naturwissenschaft und Theologie* (1952 Frankfurt a. M.) S. 49.

(5) *Ibid.* S. 56.

(6) この点については以下の文献が示唆的である。Beck, Ulrich, *Risikogesellschaft-Auf dem Weg in eine andere Moderne* (1986 Frankfurt a. M.), 1.Teil, II, 2 (S. 76); 3.Teil, VII, 4 (S. 288) (邦訳『危険社会』(東廉監訳, 二期出版刊) 107頁以下; 202頁以下) なお誤解を招かないように付言する

- ならば、私はここで、独断的な一義的真理の主張が現代において要請されていると言っているのではない。
- (7) Plotinos, *Enneades*, II, 3. 7. (Armstrong II, p.68)
- (8) *Ibid.* III, 1. 6. (Armstrong III, p. 28)
- (9) Kant, I., *Kritik der reinen Vernunft*, B XIII (PhB. 37a, S. 18). (訳文は篠田英雄訳 (岩波書店刊) にほぼ従っている。)
- (10) Picard, Max, *Die Welt des Schweigens* (1988 München) S. 18 (訳文は佐野利勝訳『沈黙の世界』(みすず書房刊) 17頁を借用した。)
- (11) 老子『道德経』上篇、二十三章 (読み下し文は福永光司 (朝日新聞社刊) にほぼ従っている。)
- (12) ヤスパースの言葉。後の註(14)の引用参照。
- (13) H. Saner (Herausg.), *Karl Jaspers, Notizen zu Martin Heidegger* (1978 München). 以下 Notizen と略す。
- (14) *Notizen*, S. 249.
- (15) Jaspers, *Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung* (1962 München) S. 421ff. (以下 *Der philosophische Glaube...* と略す。また日本語では、『哲学的信仰』と略す。なお本書には、邦訳として重田英世訳『啓示に面しての哲学的信仰』(創文社刊)があり、詳細な解説ならびに研究をまとめたものとして峰島旭雄編『ヤスパース——哲学的信仰の哲学』(以文社刊)がある。適宜参考にした。)
- (16) 例えばニコラウス・クザヌス (Nicolaus Cusanus 1401-1464) は次のように言う。「神秘神学はこうして、そこでわれわれに神の直視 (visio) が贈られる場としての沈黙へと導く」。(“*Apologia doctae ignorantiae*”, n. 10 (h. II, 7, 26-28)) ちなみに、この伝統との関わりを考慮しなかったであろうこの本の日本語訳 (渡辺二郎他訳)『ハイデッガーとの対決』(紀伊国屋書店刊)はこの箇所を誤訳している。
- (17) Jaspers, *Der philosophische Glaube* S. 422.
- (18) Heidegger, M., *Über den Humanismus* (1949 Frankfurt a. M.) S. 5.
- (19) *Ibid.* S.16.
- (20) Heidegger, M., *Der Weg zur Sprache* S. 262. (Gesamelteausgabe Bd. 12, *Unterwegs zur Sprache* [1985 Frankfurt a. M.] S. 251.)
- (21) Heidegger, M., *Grundbegriffe* (Gesamelteausgabe Bd. 51, 1981 Frankfurt a. M.) S. 64.
- (22) Heidegger, M., *Heraklit* (Gesamelteausgabe Bd. 55, 1979 Frankfurt a. M.) S. 383.
- (23) Heidegger, M., *Die Sprache*, S. 30. (Gesamelteausgabe Bd. 12, [1985 Frankfurt a. M.] S. 27.)
- (24) Heidegger, M., *Der Weg zur Sprache*, S. 262f. (Gesamelteausgabe Bd. 12, [1985 Frankfurt a. M.] S. 251.) (強調は引用者)
- (25) Heidegger, M., *Heraklit* (Gesamelteausgabe Bd. 55, 1979 Frankfurt a. M.) S. 382.
- (26) Heidegger, M., *Grundbegriffe*, S. 64.
- (27) Heidegger, M., *Das Wesen der Sprache* S. 184. (Gesamelteausgabe Bd. 12, [1985 Frankfurt a.M.] S. 173.)
- (28) *Notizen*, S. 249.
- (29) *Ibid.* S. 323.
- (30) Heidegger, M., *Über den Humanismus* (1949 Frankfurt a. M.) S. 45.

- ③1 Jaspers, K., Philosophie III, Metaphysik (1956³ Berlin/Göttingen/Heidelberg) S. 234; Der philosophische Glaube...S. 195; 417.
- ③2 比較のために二つのテキストを掲げる。
 Notizen S. 249: "Aber dieses Schweigen ist gleichsam das eindringlichste Sprechen, nicht das leere Schweigen. Es wird nicht wirklich dadurch, daß ich das Sprechen unterlasse, sondern dadurch, daß ich es zum Äußersten treibe, wo es umschlägt, uns alsbald von neuem in der Zeit wieder Sprache wird."
 Der philosophische Glaube...: "Das Schweigen an der Grenze des Denkens in Chiffren wird aber nicht wirklich dadurch, daß ich das Denken und Sprechen unterlasse, sondern dadurch, daß ich es zum Äußersten treibe, wo es umschlägt in Schweigen. Alsbald wird es von neuem in der Zeit wieder zum Sprechen treiben."
- ③3 Jaspers, K., Der philosophische Glaube...S. 195.
- ③4 Ibid. S. 417f.
- ③5 Ibid. S. 415.
- ③6 Ibid. S. 419.
- ③7 ヤスバースは、ハイデッガーにおいては「哲学と生とが分離している」と『覚書』でしばしば批判している。(例えば Nr. 117 (Notizen S. 138))
- ③8 ここでの「この思惟には歴史的進歩はない」という叙述に、ハイデッガーの『存在と時間』の冒頭における以下のような有名な言明への批判を見てとることができるだろう。「序論 存在の意味への問いの提示」第一章 存在の問いへの必然性、構造および優位」第一節 存在への問いをあらゆるさまに反復する必然性」われわれの時代は、『形而上学』をふたたび肯定するにいたったことを、現代の進歩のうちに数えだてているけれども、ここにあげた問い〔存在への問い〕は、今日では忘れさられている。」(Sein und Zeit, (1967¹¹ Tübingen) S. 2) (なお訳文は細谷他訳(理想社刊)を借用した。)
- ③9 Jaspers, K., Der philosophische Glaube...S. 421. ちなみに、この転化の構造は、先に注④として引用した、言葉と沈黙の関係に相則している。
- ④0 この、「無際限なくさらに先に>」の方法をヤスバースは『覚書』 Nr. 106 でハイデッガーに見出して批判している。「深く問うこと、それも答えが現れえないほどに深く問うことが、一つの方法だろうか。……空転する思索にすぎない無際限に問う努力へと人々を誘惑して、理性を放棄させてしまうのだ、この思索にたとえ内容が現れるとしても、それはまったく伝統的であり、問われることがないままで、非根源的で、いわば長口舌であるか或いは幻想にすぎない。……まさにこのような問いを問うこと。……」(Notizen, S. 128) 同様な批判は、Ibid. Nr. 57; 141; 168; 190; 194; 209; 229 等にも見られる。
- ④1 このシェリングに代表される「偽りの充実」について、『覚書』 Nr. 23 で、「ハイデッガーの倒錯 Verkehrung において再現されていることはシェリングにおいて壮大な様式で現れている、これを研究すべし」とされている。(Notizen, S. 53)
- ④2 Jaspers, K., Der philosophische Glaube...S. 424f. さらに、この、存在が明らかになるのは「お説を垂れることにおいてではない」ということにも、ハイデッガーの方法への批判があると思われる。『覚書』 Nr. 132(Notizen, S. 153) で「ハイデッガーは託宣する、教条的信仰との類比において。彼の思惟は解釈である、しかしそれは共同体的信仰の解釈ではなく、客観的事態 Sachverhalt

のふりをする内容の解釈である」としている。

43 Notizen, Nr. 155 (S. 169).

44 ここでは、その一節を紹介する。Ibid. S. 263f. 「あの山脈の岩だらけの高く広い台地で、昔から、各々の時代の哲学者は出会ったものであった。そこから下を見やれば、雪を頂いた山々が見え、そのさらに下方には人間の住まう谷間が見下ろされ、四囲ぐるりと遙か遠く地平線が望まれるのである。……今はもうあそこでは誰にも出会うことができないように思われる。しかし私は、かつて自ら永遠なる思弁をなしつつその思弁を重要だとみなしてくれる人を空しく探し求めている時に、そのような人物に一人だけは出会えたが、それ以外にはまったく出会えなかったように思われたことがあった。……私にとってハイデッガーとの交際はこのように進んだ。……」

45 Jaspers, K., Der philosophische Glaube...S. 418f.